

# 池

寺田寅彦

青空文庫



大学の池のまわりも、去年の火事で、だいぶ様子が変わってしまった。建物などは、どうでもなるだろうが、あの古い樹木の復旧は急にはできそうもない。惜しいものである。それでも、あの大きな木が、全部は焼けなくてしあわせであった。たとえば池の北側に、大きなまつ黒く茂った枝を水面近くまでのぼしている、あの木などもこの池の景色をスベシファイする一つのだいじな要素になっているのだが、あれなどの助かったのはしあわせである。毎年この木の下で、ドイツサークルをすえては、観測の稽古けいこのお相手をして来た私には、特にそんな気がする。

あの木の下に水面に睡蓮すいれんがある。これはもちろん火事にはなんともなかったに相違ない。ことしの夏、どこかの画学生が来てあれを写生していた。モネーの有名なシリーズがなかったら、ああいう構図は、洋画としてはオリジナルかもしれないが、今では別に珍しくはなさそうである。もつとも対象はいくら古くても、目と腕とが新しければ、いくらでも新しい「発見」はできるはずだろうが、私の見たできばえでは、そうでもなさそうであった。

あの睡蓮は近ごろのものである。もとは河骨こうほねのようなものと、もう一種の浮き草のよ

うなものがあつたのだと記憶している。ことしは睡蓮が著しく繁殖して来た。紅白二種のうちで、白いほうが繁殖力が大きいように思われる。実際そうであるか、どうか、専門家に聞いてみなければわからない。事實はどうだか知らないが、もしそうだとすると、これは一つのおもしろい問題になりそうである。それから、もし、睡蓮が他の水草を次第に圧迫して蔓延まんえんするか、しないか、これも問題である。物好きな人があつたら、年々写真でもとつておいて、あとで研究したらおもしろいそうである。

ついでながら、池には大きな鯉こいがかなりたくさんいる。あたたかい時候には時々姿を見せるが、寒中には、どうしているかさっぱり見えない。大きなすっぱんもいるそうだが、私はまだ見た事がない。あの火事では鯉やすっぱんもすっぱんも驚いた事だろう。あの時に一度池の水の温度でも測つてみたらよかつたと、あとで思いついたが、当時はそれどころではなかつた。事によると薄いスプリングシフトぐらいはできていたかもしれないなかつた。

鯉については、某教授に関する一挿話いっそうわがある。教授が池を見おろしながら、小使の某君と話していた。教授が「あいつを食つたらうまいだろうな」とひとり言のように言つたのに答えて、小使が、あまりうまくないとか、苦にがいとか言つたそうである。これに対する教授の電光のようなりマークは「ヤ、貴様食つたな」というのであつた、と伝えられ

ている。事実は保証しない。

鯉こいやすつぼんのほかに、ブルフログを養殖しようという話もあったと記憶しているが、結局おやめになったと見える。もしほんとうに、あすこに、大きなブルフログが繁殖して、大きな声でも上げているのだと、少なくとも何事かを考えさせられそうである。場所がらだけに、少なくとも新聞の青鉛筆子や漫画子の材料にはなっていたかもしれない。

池のみぎわでおたまじやくしの行列を見る事もある。あの行列の道筋に何か方則があるだろうか、水流と何か関係があるだろうか。そんな事をだれかと議論した事があった。もちろんなんの結論も得られなかった。

冗談はさておいて、この池が、これまでに、いろいろのまじめな研究の材料を供給している事も、数え上げれば、少なくないようである。

池中に棲せしそく息するある生物の研究を、学位論文の題目とした先輩が、少なくとも二人はあるそうである。

田中館たなかだて先生が電流による水道鉄管の腐蝕ふしょくに関する研究をされた時、やはりこの池の水中でいろいろの実験をやられたように聞いている。その時に使われた鉄管の標本が、まだ保存されているはずである。

つきしまる  
月島丸が沈没して、その搜索が問題となった時に、中<sup>なかむら</sup>村先生がいろいろの考案をされて、当時学生であったわれわれがお手伝いをして予備実験をやった。なんでも大きなラツパのようなものをこしらえて、それをあの池の水中に沈め、別の所へ、小さなボイラーを沈めたのを鎚<sup>つち</sup>でたたいて、その音を聞くような事をやったように覚えている。第二次の実験は隅<sup>すみ</sup>田<sup>た</sup>川<sup>がわ</sup>の艇庫前へ行って行ったのだが、その時に仲間の一人が、ボイラーをかついで棧<sup>さんばし</sup>橋から水中に墜落する場面もあつて、忘れ難い思い出の種になっている。

墜落では一つの思い出がある。三年生の某々二君と、池の水温分布を測った事がある。池の中島にガルバをすえて、小船でサーモジャンクションを引っぱりあるいては、時々水温の水平ならびに垂直分布を測った。冬の最中のある日に観測中に某君が誤って水中に落ち、そのために病気を起こした事もあつた。水温の分布はあまり珍しい事もなかつたが、深い泥<sup>どろ</sup>の中の分布を測ったのは、いくらか珍しいほうかもしれない。

この観測に使った小船は、今は理学部の北玄関の壁に立てかけて乾燥状態にある。もとは大きな盥<sup>たらい</sup>を浮かべて船の代わりにしたものであるが、いろいろの観測に必要だというので、水産講習所へ頼んで造ってもらったものである。池につないでおくと、たぶん職人が土方だろうが、よくいたずらをして困るので、ああして引き上げておくのである。ナンキ

ン錠をいくらつけ換えても、すぐ打ちこわされるので、根気負けがしたのである。無論土方が職人のしわざに相違ない。

池の周囲の磁力測量、もつとも伏角だけではあるが、数年来つづけてやって来て、材料はかなりたまっている。地形によって説明されるような偏差がかなり著しく出ていておもしろいから、いつかまとめておきたいと思いつながらそのままになっている。池の断面の形をした鉄板の片を電磁石の間において、それに鉄くずを振りかけて、その磁力線の分布を、実地と比較した学生もあつた。

池の氷が張りつめた上に、雪が積もると、その表面におもしろい紋のような模様ができる。これはドイツで〔Dampflocher〕と称するものだそうである、この成因はあまり明らかでないらしい。田中阿歌麿氏著、たなかあかまろ「諏訪湖の研究」すわこ上編七一六ページにこれに関する記事と、写真がある。数年前の「ローマ字世界」にも田丸先生が、この池のものについてお書きになったのが出ている。先生がたのお手伝いをして、例の小船で調べて回ったこともあつたが、とにかくおもしろい現象である。

先年水温を測る時の目じるしに、池の中のところどころに立てておいた竹ざおが雪の薄くつもつた氷の上に頭を出している場合に、さおの北側へ妙な扇形の模様ができる事があ

った。これもおもしろいものである。これに関してはおかつて気象集誌に簡単な記事を書き載せておいた。

池の水の振動、いわゆるセイシについては、本多さんたちの調べた結果が、大学紀要の二十八巻の五に出ている。ブリキで作った小さな模型もあつたはずである。この池の水の運動についてもまだ調べれば調べる事がいくらでも残つてゐる。池の測深もその時やつた結果が紀要に出ている。案外深い池である。

自分の知つてゐるだけの文献を数えてみても、これだけあるのだから、私などの知らない他の方面の学科に関するものをあげたら、ずいぶん分量になるかもしれない。これから後にもまだどれだけの可能性があるかわからない。

こんな事を考えてみると、あの池は、いつまでもつぶしてしまいたくない。大学の地面が足りなくなつて、あらゆる庭園や木立ちがつぶされる時が来ても、あの池は保存しておいてもらいたい。景色や風致がどうであるというのではなくて、何かしら学術上の研究資料の供給所として、あるいは一つの実験用水槽として保存してほしいのである。

ついでながら、あの池の成り立ちについても問題がある。ある人の話では、元来あそこには泉があつたのを、前田家の先祖が掘り下げて、今の形にしたのだそうである。そう言え



ば池の西北隅せいほくぐうから水がわいているらしい。そのへんだけ底に泥どろがなくて、砂利じやりが露出している事は、さおでつついてみるとわかる。あの池から、一つの狭い谷が北のほうへ延びて、今の動物地質教室の下から弥生町やよいちやうの門のほうへ続いていた事が、土工の際に明らかになったそうである。この池の地学的の意味についても、構内のボーリングの結果などを総合して考えてみたら、あるいは何事かわかりはしまいか。こんな空想を描いてみる事もできる。

文科の某教授がとった、池を中心とした写真が、何枚か今のバラック御殿びかんの楯間たてまにかかっている。今ではもう歴史的のものになってしまった。私はいつか、大学百景といったような版画のシリーズを作ったらおもしろいだろうと思った事があった。もしそんなものができるとしたら、その内の少なくとも十景か十五景かの中には、きつと、この池の一部がはいつていたに相違ない。それほどに、この池は、風致の上から見た大学にとって特異なものである。それが一夜の火事でだいぶん変わった。こういう変化は無論不可逆的变化である。これからさきどんなに美しく変わるかしれないが、大正十二年以前に、大学の門をくぐった人々の中にある「池」の影像是やはり火災以前のそれでなければならぬ。

われわれの池が、いろんな小説や感想文の場面に使われた例もなかなか少なくなさそうであるが、このほうの文献はそのほうの専門家をお願いしたほうがよいと思うから、ここではいつさい触れない事とする。

(大正十三年十一月、理学部会誌)

# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦随筆集 第二巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年9月10日第1刷発行

1964（昭和39）年1月16日第22刷改版発行

1997（平成9）年5月6日第70刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 池

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>